

雪の孔雀

北条かおる

春とは名ばかりの、この日……。

京は朝から粉雪がちらついていた。

荒々しく襖を開けて、男の手を振りきって逃れ出て来たちさの首すじに官能の余韻がある。かすかに汗が浮いて、ほつれ毛が額に貼りついていた。

裸身に着物を巻きつけているものの、白い乳房の半ばがあらわになっている。丸めた帯で前を押さえたちさの顔に嫌悪感があった。

「このようなこと、いずれ父上に知られずにはすみません」

「よいではないですか。そのほうが話が早い。私たちはすでに夫婦も同然なのだ。それ、このようにな。お師匠もお許しになるしかありません」

「私は嫌です。まるで獣のような浅ましい格好で——。重蔵様、もうここへは来ないで下さいませ」

ちさが吐き捨てるように言った。

「いやいや、ちさ殿の体は、そうは言っておりませんでしたぞ、ふふふ。この頃は甘美な味を覚えてくれたとみえる」

ちさは、キツと振り返って、胸をはだけたまま手枕をした平尾重蔵を睨みつけた。

「父上がいつお戻りになるかも知れません。とにかく早う身支度を」

半年ほど前からである。重蔵がここへ来るたびに、運よく師匠が留守であれば、強引にちさを寝間に引きずり込むようになっていた。

絵師の勝浦三翠は昼過ぎから、近くの円得院に招かれて、浄源和尚と碁を打っている。

重蔵は、その勝浦三翠の弟子だった。

絵の弟子ではあっても武士である。

二条城を挟んで、東と西に町奉行所がある。平尾重蔵は、京都東町奉行・菊谷伊勢守配下の同心だった。三十五になるが独身で、普段は東町奉行所内の組長屋に住んでいる。

同じ同心だった父親が病死して、重蔵がその後を継ぐとまもなく母も亡くなった。以来、

天涯孤独である。

師匠の三翠も元は勝浦源兵衛という侍で、東町奉行所の与力を勤めていた。現役当時、重蔵の父とも親しかったものだが、道楽が昂じてついに刀を捨て、本職の絵師に転じた人物である。

重蔵は子供の頃から源兵衛に絵の手ほどきを受けていた。剣術の道場へ行くより、絵筆を持って源兵衛のもとに通うほうが熱心だった。源兵衛も重蔵の絵画の才能を愛した。

ことに重蔵が一人きりの境遇になってからは、たまには食事にも招き、まるで実の息子のように接してくれた。

重蔵は年の離れたちさを妹のように可愛がり、幼いちさも彼を慕って無邪気に来訪を喜んでいたものだった。

今でも御役目が非番の日は、こうして東山の麓・白川村にある師匠の家に入りびたりになるのだった。

「うう、寒い。たまらん底冷えだな」

半裸の重蔵は身をふるわせ、再び布団にもぐり込んだ。

「お、そうだ、ちさ殿。台所の流しに軍鶏があります。鍋にしてくれませんか。お師匠が戻られたら三人でやりましょう」

その師匠が帰って来たのは、いつもよりも遅く、日が暮れてからだだった。

円得院で借りて来た提灯をちさに渡し、食い散らかした軍鶏鍋を見て、

「重蔵が来ていたのか。ふうむ」

不快な顔つきになった。

今日の午後、庫裏の間で……。

浄源和尚は、火鉢に手をかざし、碁石を置きながら、

「ちささんも今年で十九やろ。そろそろ出さぬわけにもいくまい」

「そりゃあ、な。考えぬでもないが、男親のこととて何をどうしたらよいものやら」

十年前にちさの母親が亡くなってからは、父と娘の二人暮らしだった。

「和尚、どこから話でもあったのか」

「うむ、あった。それで今日は来てもろたんや。うちの檀家のせがれでな。わしもよう知っておるが、悪い話ではないぞ」

町医者 of 長男だという。

「ほう、医者 of 跡取りか」

医師の家なら、商家ほどには小うるさい奉公人もおらず、娘もさほど気を遣わずにすむに違いない。勝浦三翠は乗り気になった。

「重蔵め。これからは、わしの留守には遠慮させねばならぬな。世間の目もある。よい縁談が持ち上がった以上はな」

「縁談——でございますか、父上」

重蔵様との秘事を知られてはならぬ。ちさは蒼ざめた。

両町奉行所には、それぞれ与力が二十騎、同心五十人が配されている。東と西が交互に月番となつて、市中の治安維持、町家の訴訟事に当たっている。

三年前の享保十七（一七三二）年、冷夏と虫害が原因で西日本一帯が大飢饉に見舞われた。瀬戸内沿岸を中心に、実に一万人以上の餓死者を出したと言われている。

各地の飢民は京にも多数流入して、暴徒化した一部が荒々しい事件を起こしたこともあったが、近頃の京はようやく平穏を取り戻している。

重蔵は、これまで市中見回りの時でも血生臭い凶悪事件に出くわしたことがなく、人を斬つた経験がない。人どころか、犬猫にすら刀を抜いたことがなかった。

同僚も似たようなものだった。昨今、若い武士の間では細身に軽い刀が流行しているが、それでも無用の腰の二本差しが重くてならない。

気鬱な巡回勤務を終え、奉行所に戻つて筆頭与力に報告を済ませると、重蔵は組長屋にこもりきりになる。

いま重蔵が夢中になっている絵の題材は孔雀だった。

（円得院の方丈の襖に、目の覚めるような孔雀図を描きたい。それも、きわめて精密にだ）このことだった。

去年の秋——。

円得院でボヤ騒ぎがあり、大事には至らなかつたが、方丈の一間の襖が焼けた。今は新しく白無地の襖が立てられている。

ここに渾身の孔雀図を描きたいのだ。そのために孔雀に関する資料も漁つた。

重蔵の頭の中には、すでに一对の孔雀の絵が完成していた。小さな滝のほとりで、華麗に羽を広げて、牝を誘っている構図である。

構想の中で、重蔵の描いた孔雀は息づいていた。

夜な夜な、寺が寝静まると、二羽の孔雀が襖から抜け出し、

(座敷で舞い、踊り狂うのだ)

そうして狂乱が最高潮に達し、キエーツと一声叫ぶと、羽を広げた孔雀の背に明王が出現する。

(孔雀明王だ。あの方丈の間を、俺の「孔雀の間」にするのだ)

思うだけで重蔵の血が滾った。

孔雀は害虫や毒蛇を食うことから、人々の災厄をも食い尽くしてくれる、と神格化され、崇められてきた。それが孔雀明王である。

ところが……。

浄源和尚は、にべもなかった。

「すでに、おまえの師匠に依頼済みじゃ。せいぜい師匠の仕事を手伝うことじゃな」

重蔵は引き下がらなかった。

「しかしなあ、和尚。こう申しては何だが、うちのお師匠ではとうてい無理だ。いつまで待っても、この襖は白無垢だぞ。何やら死装束のようで不吉ではないか」

師匠の勝浦三翠は、五十をはるかに越えている。近頃では意欲も集中力も衰えてきたよう、襖絵の準備に取りかかった様子はなかった。

「だから、この俺が——」

「重蔵。坊主に向かって死が不吉と講釈をたれるか、愚か者め。帰れっ」

珍しく和尚が声を荒げて、重蔵は薄ら笑いを浮かべるばかりだった。

(老いたお師匠には任せられぬ)

人前で口にしたことはないが、師匠の感性では古臭い絵しか描けないのだ。とうに師匠の時代ではなかった。

深夜、組長屋の畳に紙を広げ、重蔵は下絵書きに没頭した。何枚も何枚も破り捨てた。

質素な暮らしを強いられるが、絵のための紙反故だけは無駄とは思わなかった。

一睡もせず夜明けを迎えることもしばしばだった。

一心不乱に筆を走らせる重蔵の目は血走っている。熱中するあまり、息づかいは乱れ、唇からは何やら意味不明な言葉が洩れた。思い出したように無気味な笑いを浮かべることもあった。

「絵に向かった時の、あの狂ったような目がおぞましいのです。とても常人とは思えませぬ」

ちさが父親に訴えているのを重蔵は知らない。

孔雀がわが国に入って来たのは、ずいぶん古い。推古天皇の御代に、新羅から贈られた記録もあるそう。今から千年以上も大昔のことだ。

藤原道長の頃にも、足利將軍家の時代にも、海を越えて来て宮中に献上されているらしい。

もちろん平尾重蔵は実物を見たことがない。

重蔵の手元に一枚の孔雀図がある。三条大橋畔の古書屋で見つけたものだ。一昔前に江戸の絵師が描いた絵と聞いた。

(だが、これも――)

従来からの絵を模倣したものに過ぎないのだ。鮮やかな彩色も毒々しいものにしか見えない。重蔵は不満だった。

この江戸の絵師は、

(本物の孔雀を見ていない)

それは今の重蔵も同じ立場にいた。

「よいか、重蔵。ただ漫然と眺めていたのでは駄目だ。命をかけて見ようとせぬと眞実は見えぬぞ」

絵を習い始めた少年の頃、師匠の三翠からそう教わったものだった。

おのれの目で孔雀をじっくりと観察したい。羽毛にも触れてみたい。鳴き声も聞きたい。

一夜ごとに、その思いが募ってきた。

――また、この日も夜が明けた。

眠くはないが腰がだるい。一晩中、畳に屈み込んでいたせいだ。これでは市中見回りに差し支える。重蔵は、腰を伸ばすつもりで組長屋を出た。吐く息が白くなる朝だった。

歩くほどもなく二条城の濠端に出る。お濠の岸边は整然とした松の並木である。まだ誰も出歩いてはいなかった。

二条城は京都御所を守護するため徳川將軍家が上洛した際の宿所として築かれたものだが、主が常住していないどころか、現在ではまったく利用されていない無用の城である。

東照大権現(初代・家康)様、台徳院(二代・秀忠)様、大猷院(三代・家光)様は、ここで將軍宣下の祝賀の儀や拝賀の礼を催されたそうだが、四代様からは江戸で行われるようになり、ここ百年の間、將軍家の入城は一度もない。

お濠のさざ波に、廃城となった伏見城から移築された白い天守が揺れている。

寒風に頬をなぶらせながら、重蔵は、また絵のことを思った。

孔雀という鳥は、頭から胸にかけては瑠璃色。腹部は黒にも見える藍色。体側面は灰褐色で、脚は白く、背から長い尾羽にかけては青緑色という華麗な色彩におおわれている。

それは江戸の絵師も表現していた。だが、重蔵は、

(問題は色そのものではない)

と感じている。

工夫を重ねて、何度も下絵に彩色してみたが、満足のいく出来栄えにはならなかった。絵に煌めきがないのだ。

(本物の孔雀は、もっと神々しくて、色合いも高貴な筈だ)

重蔵は、精緻な万華鏡を連想した。

お濠に朝陽が射してきた。水面がまぶしく輝く。水に反射した光は、二条城の石垣と白壁に動く紋様を写した。

生きた孔雀はきつと、こんなふう煌めいているに違いない。重蔵は確信していた。

思い余った重蔵は、師匠に相談してみる気になった。ここ数年なかった心境である。

次の非番の日、白川村に行った。

勝浦三翠は厚着をし、苦しげに咳き込みながら下絵を描いていた。

「お師匠。風邪ですか」

「うむ」

だいぶん弱っているようだ。顔もやつれて、貧相で無能な老人としか見えなかった。

(ははあ)

下絵を見た。どうやら群虎図にするらしい。

さすがに線描は確かなものだ。しかし、図柄に斬新さがない。虎や龍の図など、どこの禅寺にもある題材だ。

やはり画才が涸渇しているのではないか。重蔵は失望した。助言を求める気が失せた。

「お師匠。円得院の襖絵ですがね。私に任せてもらえませんか。ちさ殿も私も、お師匠のお体が心配なのです」

一瞬、勝浦三翠の筆が止まった。やがて重蔵が色よい返事を諦めて座を立つまで、無言のままだった。

この日、重蔵は合鴨を持参していた。

この男、こういうことには妙に律儀で、何かしら手土産を用意してくる。

「ちさ殿。鴨の蕎麦も悪くないが、これから蕎麦を打つのも手間でしょう。熱々の鍋がいい。お師匠にも温まってもらいましょう。葱はありますかな。鴨鍋は葱がないと美味しくない」

台所で、ちさにまとわりつく。

寒い日は鍋物に限るし、いつも一人でわびしく食べているから、この家へ来ると重蔵は鍋を囲みたがる。

「今日は無理かも知れませんが、ちさ殿」

ちさの耳に吸いつかんばかりに口を寄せて、重蔵がささやいた。

「今日ばかりか、あのような淫らがましいこと、今後いっさいお断りします。ほんとに困るのです——ひいっ」

合鴨を取り落とすところだった。重蔵がちさの肉づきのよい、柔らかな尻をわしづかみにしたのだ。

重蔵は好色な笑いを浮かべた。ちさの体をわが物と思いが上がっている。ちさは腹立たしさと口惜しさで涙が出そうだった。

重蔵が役目を怠るようになった。

たまらぬ腹痛ゆえ、と届け出ておいて、組長屋に引きこもり、孔雀図に没頭した。心配した同僚が見舞いに来て、座敷にも上げぬ始末だった。

重蔵には明らかに何かが憑いていた。飯も食わず、ぶつぶつ呟きながら絵筆をふるった。

孔雀がその尾羽を広げると、無数の丸い斑点がある。灰色地に青藍色の目玉さながらだ。

さらに目玉の周りは緑色に縁どられている。

(目だ。まさしく孔雀明王の神聖な目だ)

丹念に色をつけながら、

(本物の孔雀なら、この目はそれぞれ、まばたきしているのではあるまいか)

そんな気がしてならなかった。

障子の外が白々とする頃、ようやく一枚の絵が完成した。羽毛の一枚一枚を丹念に描き入れた細密な孔雀図である。この若々しい躍動感は、

(ふん、老いたお師匠には出せまい。もはや俺のほうが上なのだ)

だが……。

絵を眺めていた重蔵の顔が、徐々に歪んできた。

(違う——。これでは江戸の絵師と同じだ)

絵は華麗でも、やはり煌めきがない。青藍色の目玉も、まばたきをしているように感じられない。

忌まわしいものであるかのように、せつかくの苦心作を重蔵は破り捨てた。

疲れ果てている。首を垂れた。

冷え込みの厳しい二月の朝だった。

数日後——。

平尾重蔵は思わぬ朗報を耳にした。

なんと二羽の孔雀が京に来るといなのだ。

重蔵は上役の与力のもとへ飛んで行った。上役が顔を引くのも気づかず、唾を飛ばし、吃りながら訊ねた。情報は間違いではなかった。

九州のさる藩から、江戸の八代将軍・徳川吉宗公へ献上される、つがいの孔雀だそうだ。江戸まで船で運ばれる予定だったが、それをお聞きになった帝が、

「見たい」
と仰せられた。

今上陛下は、昨年、十五歳で即位なされたばかりの桜町天皇である。後に「桜町院御集」など御製を多く遺されるほどの歌人でもあるから、好奇心も感性もお強いのであろう。

そうなると京を素通りもならず、孔雀行列を仕立てて、大阪から陸路で都入りすることになった。

(千載一遇の好機！)

重蔵の血が逆流した。

昨年の秋、お役目上のことで、その藩の京都留守居役・竹田弥十郎と知り合ったばかりだ。藩邸も何度か訪れたから、門番とも顔見知りだし、邸内の様子も見当がついている。

(見られるぞ。本物の孔雀を見ることができるとぞ)
すでに目に異様な光が宿っている。

孔雀の尾羽は五尺もあるという。通常の籠に乗せられるものではない。特別な檻をしつらえてくるに違いなかった。

あの藩邸は、門を入るとすぐに大玄関がある。おそらく夜間は、大玄関脇の一室に檻ご

と引き入れるだろう。いかに鳥とはいえ、大事な献上の品を庭先などに置くわけがない。
(いかにすれば藩邸内に入り込めるか)

正面から申し入れても許されぬに決まっている。重蔵は、当日の門番とのやり取りを、あれこれと想定した。

庶民の間でも日に日に評判が盛り上がり、ついに三月のその日を迎えた。

春の雪がちらつく寒い日だった。

都大路の沿道には、朝から群衆が詰めかけている。持参した酒や団子を飲み食いしつつ待つている者たちもいた。ようやく昼頃に孔雀行列が見えた。

前後を十数人の旅姿の武士が警護している。

檻車は大小二台だった。孔雀同士が傷つけ合うのを懸念して、別々の檻に分けたのだから。

無言の孔雀行列は誇らしく進み、あっけなく三条木屋町の藩邸に入っていった。

誰もが拍子抜けした顔つきになった。

「なんやねん、あれは？」

「あほらし。この寒い中、わしら何を見物に来たんや」

おそらく防寒のためだろう。孔雀の檻車はいずれも、全面、黒い布で覆われていたのだ。不満を言いつつ引き上げる人混みの中に、編笠で顔を隠した平尾重蔵の姿があった。

今日は非番ではない。着流しで市中見回りの途中である。このあたりは重蔵の受け持ち区域ではないから、奉行所の同僚に見られるのは具合が悪かった。

二台の檻車がゴロゴロと引かれて藩邸内に入ったのを見届けると、

(よし)

すぐにその場を離れた。

明朝には天覧に供するため、宮中に運び込まれる。天子様や女官、殿上人の目を存分に楽しませた後、大阪湾で待機している藩の船に向けて、伏見港から淀川を下ると聞いている。

機会は今夜しかなかった。

夕刻……。

鴨川に面した先斗町の居酒屋に重蔵はいた。冷えた体を熱燗で温めながら、日が暮れるのを待った。

一か八かである。勇気を奮い立たせるためにも、少量の酒は必要だった。写生するひまはないかも知れぬが、懐には絵筆と紙を用意してきた。

長い一日になった。

とつぷりと暮れて、先斗町の路地を行く人が減った頃、重蔵もようやく腰を上げた。暗くなつてから、また雪が降り始めた。明日の朝には道にも積もりそうな牡丹雪だった。

三条木屋町の藩邸は近い。

門の前に立った。深く息を吸って躊躇を振り払う。腹を決めて、門わきの潜り戸を叩いた。やがて、内から潜り戸が開いて、かねて見知った治兵衛という門番が顔を出した。

「や、あなた様は、お奉行所の――」

「平尾重蔵です。夜分に恐れ入るが、竹田弥十郎殿はおられましたか」

東町奉行・菊谷伊勢守の指示によって、明日の御所までの沿道警護の打ち合わせに参つた、と重蔵は伝えた。

母屋から離れた別棟が賑やかだった。管絃こそないが、手拍子に合わせて鄙びた酔歌が聞こえる。

「ははあ、あれですか」

あれは国元から孔雀を守って旅して来た藩士方を、竹田様のご配慮で慰労しているのです、と門番は顔をほころばせた。

「では、しばらくお待ちを」

門番は、竹田弥十郎に話を通しに行った。京都留守居の重役は、今夜の宴会には参加していないらしい。

他に誰もいないのを確かめて、重蔵は素早く大玄関に入った。門番が戻らないうちに孔雀を観察できれば最良だ。だが、たとえ門番が先に戻ったとしても、重蔵の姿がないのを不審には感じるだろうが、まさか藩邸内に無断侵入したとは思うまい。

とにかく本物の孔雀をこの目で見ることだ。

時間はわずかしかなかった。

思った通りだった。車輪をはずされた二つの檻が、大玄関脇の十二畳間に置かれていた。

重蔵は、忍び込んで襖を閉めきった。雪で湿った履物は帯の腰に挟んだ。

二本の大蠟燭が燃えている。観察するには少々仄暗いが、贅沢は言っていられない。

大きい檻が牡の孔雀と見当をつけた。かぶせられた黒い布をめくる。

絢爛豪華な色彩の大きな鳥が、クイツと頭をもたげた。

(むう……)

孔雀とはこれか、と唸った。首から胸にかけての青藍色に目を奪われた。色はまさに江戸の絵師が描いた通りの鮮やかさだ。

あらゆる色彩を、重蔵は感動をもって、瞬時に目に焼きつけた。

問題は尾羽の水玉だ。孔雀明王の聖なる目だ。どれほどに生き生きと輝いているのか。

(見せてくれ、頼む。これ、孔雀よ)

重蔵は檻の隙間に腕を入れ、孔雀の首を掴んで引き寄せた。孔雀は激しく抵抗した。

(こ、これ、騒いでくれるな。何もせぬ。見るだけだ)

重蔵は片手でほそい首を握り、もう一方の手で尾羽を広げようとした。ずいぶん固く閉じられている。容易なことではなかった。

牝の異変に感応したのか、もう一つの檻の牝が興奮して一声鳴いた。重蔵を縮み上げらせる大きな鳴き声だった。

これ以上の長居は危険だ。重蔵は焦った。

(せめて一目だけでも……。一目だけでも見ておかねば)

重蔵は手に力を込めた。ゴキッと異様な音がした。尾羽の骨が折れたのだ。にわかには孔雀が暴れなくなった。同時に首も折れていた。

(し、しまった)

重蔵は狼狽した。将軍家へ献上の孔雀が、とんでもないことになってしまった。孔雀はピクリとも動かない。

(逃げなければ——今のうちに)

誰にも気づかれずに、この場を去るのが先決だ。ふるえる手で黒い布を元通りにかぶせた。十二畳間を跳び出す。その途端に、ギョッと全身が凍りついた。

「平尾殿。おぬし、そこで何をしておられる」

門番を従えた竹田弥十郎が大玄関に立っていた。尋常でない重蔵の様子に、

「その部屋には大事な孔雀が——治兵衛、見て参れっ」

「はっ」

うわあつ。重蔵は錯乱した。無意識のうちに刀を抜き、治兵衛の背中を斬り下げていた。

「おのれ、狼藉っ」

素手の竹田弥十郎が重蔵につかみかかった。その腹を深々と刺しつらぬいた。刃先が弥十郎の背中に突き抜けていた。

生まれて初めて人を斬った。腹部に吸い込まれた刀の、あまりにも柔らかな感触に重蔵は驚いた。

床に流れた大量の鮮血に重蔵は酔った。床が揺れているようだ。吐き気にも襲われた。血刀を拭う余裕もなく鞘におさめて、重蔵は藩邸を脱出し、闇の中に消えた。

鴨川に沿って北に向かう。胃が収縮している。途中で二度嘔吐した。松の下枝に積もった雪をすくって口をすすいだ。

わき目も振らず逃げた先は白川村だった。勝浦三翠もちさも、この夜はまだ起きていた。勝手口から逃げ込むなり、重蔵は、甕の水を柄杓で立て続けに三杯飲み干した。それでも喉のひりつきはおさまらなかった。

手首が血で染まっているのに気づいた。水をかけ、慌てて洗い落とす。

着物の袖と胸元の返り血に、ちさが目を瞠った。

「重蔵様。まあ、血まみれではありませんか。一体どうしたのです——父上、父上っ」
ちさの悲鳴に似た大声で、三翠も急いで台所に来た。

「どうした、重蔵。何があった？ 捕物で不覚をとったか。傷口を見せてみる」
「違う。俺の血ではない。ひ、人を斬った」

重蔵の腰がふらついた。土間に尻を落とすところだった。

あの二人に、とどめを刺さなかった。竹田弥十郎と治兵衛の口から、平尾重蔵の犯行であることは、今頃は明らかになっていよう。怒り狂った藩士たちは東町奉行所へ捻じ込み、重蔵が白川村のこの家に入りに入っていることも知るに違いない。

まもなく討手がここにやって来る。

「ちさ殿。俺と一緒に逃げてくれ、今すぐに」

ひいっ。手首を掴まれて、ちさは腰を引いた。

「重蔵、取り乱すな。経緯を話してみよ」

「お師匠。俺はもう京にいられぬのです。説明するだけのひまもない。ちさ殿を連れて身を隠します。さあ、ちさ殿、そのままがいい、支度は要らぬ」

「たわけっ。ちさは医家の嫁にと決まっておるわ。夏には祝言じゃ。その手を離さぬか。これっ」

ぴしりと手刀で重蔵の腕を打った。

「な、なに、ちさ殿が嫁に行くとき？ ちさ殿、そりやまことか？ 嘘であろう」
「嘘ではありません。ですから——ですから、今後はいっさい困ると申しました」

「なにゆえ俺に黙っていた。そのようなこと認めぬぞ。あんまりな仕打ちではないか。あれほど俺と肌を合わせ、夫婦同然に何度も契っておきながら」

いやあつ。反射的に、ちさは重蔵の口を塞ごうと跳びかかった。決して父親に訊かれてはならない言葉である。

ちさは土間に叩きつけられた。

「娘に何をするっ。重蔵、貴様狂うたか」

「ええい、うるさいっ。何につけても、お師匠は俺の邪魔ばかりする。な、なぜだっ」

つかみかかって来た三翠を、重蔵は抜き打ちに斬り、浅傷と見て、さらに胸を刺した。

三翠は仰向けに、どうと倒れた。

土間のちさは、口から血泡を噴いて痙攣している父を見て呆然となった。その手を重蔵は乱暴に引いて、

「ちさ殿、来るのだ。来いっ」

ひ、人殺し。ちさは、かろうじてそう呟いた。

「来ぬか。一緒に来ぬのか。どうしても俺が嫌か」

「嫌でございます。だ、誰がそなたのような狂人と」

むうっ。刀を持った重蔵の手がふるえた。

「ちさ。俺はそなたと添うものと決めていたのだ。昔からだ。そなたもそのつもりではなかったのか。その俺を狂人だと？ おのれ、そんなふうに思っていたのか。おまえは俺のものだ。他の男に抱かせるくらいなら、いっそ——」

重蔵の目が据わった。

暗い雪の中をさ迷った重蔵は、どこかの塀際を歩いていた。そして、見覚えのある椎の老木に出くわした。

(ああ、円得院の塀だったか)

若い頃には、酒に酔ってこの椎の木に登り、境内に跳び下りたこともあった。

重蔵は、雪のこびりついた古い幹に取りつこうとした。その時になって初めて、右手に血刀を提げたままであることに気がついた。

握った指が硬直している。手を振っても刀が落ちなかった。

くそっ、くそっ。左手で指を一本ずつ剥がしていく。ようやく重い刀が雪の上に落ちた。

重蔵は木によじ登り、練塀を越えた枝を伝って、円得院の境内に跳び下りた。

今日という日は、いかなる厄日であることか。尾羽を広げた孔雀を見られなかったばかりか、やることなすことが、ことごとく取り返しのない事態に陥っていく。

(俺はこの目で孔雀を見たかった。ただ、それだけのことなのに……)

絶望感が重蔵を襲った。

寺は寝静まっている。汚れた足も構わず、重蔵は縁側から方丈に上がった。ご本尊の薬師如来の前の灯明を手にして、白無地の襖がある一室に入った。

真っ白な襖の前にあぐらをかく。やや長い間、重蔵は襖を見つめ続けた。

(ここが俺の「孔雀の間」になる筈だった)

一体、誰の妨害によって、こんな最悪の結末になったのか。不条理でならなかった。

重蔵は片手で灯明をかざし、もう一方の手を襖紙に押しつけた。

一度は洗った手が、新たな血に濡れている。

おもむろに手を動かす。色がかすれると、指先を袖口の返り血にもっていった。やがて、朱の線描で孔雀の輪郭が出来上がった。

(これが俺の孔雀図か)

自嘲しつつ、何度も朱の線をなぞった。灯明の小さな炎に、鮮血の孔雀が妖しく揺らいだ。

重蔵は方丈前の庭に出た。池泉にも雪が落ちては溶けている。

円得院の創建は室町時代だそう。一頃は足利將軍家の庇護を受けて隆盛を誇ったそうだが、今は見る影もなく、伽藍も敷地も十分の一ほどの規模に縮小されている。

重蔵は、何を考えるのも面倒なほどに疲労困憊していた。何がどうなろうと、どうでもよかった。

ふと……。耳をそばだてた。

練堀の外が騒がしい。雪の足跡を追って、大挙して討手が来たのだ。西国訛りだけではなかった。どうやら東町奉行所の同心たちもいるようだ。

椎の根方に捨てた刀が発見された。

「おお、平尾重蔵の差し料だ。血も新しい。これで絵師父娘をも殺めたのだな」

「この円得院は重蔵にも縁のある寺。ここに逃げ込んだ証拠だ。寺の者を起こして中を検
めい」

「おうっ、心得た」

声高な討手の話し声は、もう重蔵の耳には届いていなかった。

重蔵は白く変貌した草深い庭を巡って、池に流れ込む小さな滝の前にいた。雪の積もった岩に腰かける。

どこにも逃げ場はなかった。師匠もちさもおらず、この世には、もう安住の場所はない。

池泉回遊式の静かな庭園だった。しんしんと降る雪が、あらゆる音を吸っている。

重蔵は小刀を抜いた。左の首すじに当て、片手を添える。

むっ。ためらうことなく深々と刃を引いた。草をおおい隠した雪に鮮血が噴出した。

まさに、その瞬間である――。

不思議にそこだけ黄金色の光の射し込む滝の下に、華麗な尾羽を丸々と広げ、キエーッと鳴く神々しい孔雀を、重蔵は確かに目撃した。

孔雀明王の無数の聖なる目玉は、緑色に縁どられた青藍色に煌めいている。そのすべてが重蔵を不思議そうに見つめ、それぞれまばたきしているではないか。

(見えた……。ちさ、見えたぞ)

発見された平尾重蔵の凍えた遺体の表情は、どことなく満足げに見えたという。

〜終〜

北条かおる小説工房（公式サイト）所収